

小羊の牧場

元小学科主事 櫻村 辨市
(昭和4年4月～17年3月在職)

郊外学園

- 秋晴れの空高く鳴く百舌の声
- かさかさと 落葉ふんでいく秋の道
- 縁がわに ひなたぼっこのおばあさん
(小学部五年生の郊外学園の詩?)

大都会の子供達は自然とのかかわりが少ない。家庭での生活も、学校での学習も、限られた環境の中で予定された経験を繰り返すのに過ぎない。

教育の根底は自然に帰ることであり、人間は大自然の中で、自由にもっとたくましく生きることが大切であろう。とりわけ温室育ちの英和っにはその必要性が痛感される。

長い間追い求めた夢が、日頃の祈りが、やっときかれて、いよいよ郊外学園が開始されたのは昭和14年(1939)9月のことである。

郊外学園は郊外での学習というだけのものではなく、また農場とか別の運動場でもなく、定期的遠足の行先でもない。郊外学園は本校内では出来ない学習をし、味わえない大自然の気を味わい、見られない天然の美しさをさぐり、聞くことの出来ない天来の音楽を聞きながら、汗を流しての労作を体験する人間学習の場である。学校の延長であり家庭の延長としての子どもの生活場である。解放された新しい学習の世界である。美しい自然の中でのびのびと学習し労作し運動する場所である。

記念すべき建国2600年を迎えているいろいろな企画がなされ、設備も充実されて、もっともっとこの施設が活用されるようにと希望し祈りつゝ郊



郊外学園の作業

外学園の発展に子どもらと共に力を尽した。

郊外学園の環境

東京池袋からは遠くない練馬台の東北部、埼玉県境に近い自然の変化に恵まれたところ、ここに花岡学院がある。この学院は都心部(主として神田区内)の虚弱児のために設立された私立の健康学院である。花岡和雄院長の厚意とご助力によって、そこに隣接する相当広い芝生と畑地を借用することが出来たばかりでなく、花岡学院の全施設を私達に解放し利用出来るようにして下さった。

花岡学院の紹介 花岡学院は1925年(大正14年)11月医師花岡和雄氏が私財を投じて常設の林間学校として設立し(小学校令に依る認可)、養護教育に成果をあげたが、昭和18年神田区立健康学院として公立に移管された。学院は健康養護の教育には好適地であり、ずいぶん広い敷地で武蔵野の色濃き起伏高低に富む自然環境であった。校庭より湧出する清泉は池をなし、

小川と流れ、滝となってプール(25m)に注ぐ。松・杉・檜・栗等千数百本を数え、樹令百余年に及ぶ赤松数十本が聳えている。

学園内には 輝きの芝生・学園アルプス・森の学校・緑の教室・螢川・鷺の池・星の滝・ささやきの小路・スタコラ坂・学園ジャングル・神宮山等々のほか、近くに白子ラインもあり、少しはなれて、さくら草の自生地浮間原もある。

※1979年の暮れ、私は東上線成増駅で下車40年近い昔の思い出を辿って、学園の跡を訪ね、当時の院長の令弟花岡信雄医師にお逢いして寸時の懐旧談を交すことが出来た。

郊外学園での小羊

郊外学園のセンターは、輝きの芝生である。花岡学院では一教室を私たちのため解放して下さったが、プールを使用する以外の時はたいいてこの芝生が集合休息の場となり、礼拝・祈りの岡でもあった。それにつづく広い芋畑、さつまいも掘りは初めての経験である。汗を流し土を手にしての労作である。驚きと歓喜の叫びがあちこちから聞こえて来る。

枯葉や枯枝枯草を集めての焚火での芋焼きは感激の最高潮である。手を灰だらけにして、口のまわりも黒くして、煙に涙を流しながら、うばいあつての焼芋の試食をする令嬢たちのあられもない



かがやきの芝生・朝の祈り

姿に、目黒のサンマを連想させられる。尊い経験であったことと思われる。芋を掘った後作は大根蒔、練馬大根の本場でも東洋英和の郊外学園ではどんなに成育することであろう。

新しい教育の試みに大きな夢と期待をかけた郊外学園に思いもかけぬ暗雲がただよいはじめた。それは国際情勢の大変動の萌である。



自然研究

郊外学園にかける夢と小羊の声

広野に解き放たれた小羊たちはよろこんだ。それは彼女らの詩となり文となって記録された。

○郊外学園には山羊がいました。

その山羊がとてもかわいいので、

私があたまをなでてやると、

メーメーメーといいました。

わたしが「かわいい山羊ね」というと、

山羊はとてもよろこんでいるようでした。

(小二)

○十月十四日、私はいつもよりずっと早くと

びおきました。お母様が「晴子は早いね」と

いって起きていらっやいました。私は洋服

を着ながら「今日はね、郊外学園に行ってお

いもほりが出来るのよ。」という、お母様

もにこにこしながら「いいわね、たくさんと

って来てちょうだい。」とおっしゃいました。

(小三)

○おべんとうの後、おいもがなかなかやけない

ので、渡辺さんと節子さんとアルプス山を下ることにしました。まず穴のあいている所へ足をかけたが、その間があまりはなれているので、しゃがんだままズルズルズルとおっこちてしまった。上では二人がゲラゲラ笑っている。私もおかしくなって笑いながら山の下の道まで落ちてしまった。渡辺さんもズルズルすべり落ちて来た。上では節子さん一人こわそうな顔をして土にしがみついている。

(小四)

- 秋日和 むしろのもみに とんぼとまる
すすきのほ なびいて秋の空高し

電車は十五分程で成増駅に着くといせいよくみんな電車から飛び出てくる。霜どけのくちゃくちゃの道のなるべくかたい所を歩いて郊外学園にいそいだ。

○○先生が「みんな枯れ草や枯れ枝を集めてこい」とおっしゃった。十分程で枯草や枯葉の山ができた。それに火をつけると白い煙がモクモク出だした。私たちはそのまわりに集まって、さんびかをうたった。

煙は青空に吸いこまれるように立ちのぼった。

(小六)

小学部と共に25年

前小学部長 江 良 顕三郎

(昭和24年10月～50年3月在職)

私が小学部に奉職したのは昭和24年10月。長野彌院長、外崎長三郎小学部長が学院の戦後復興に寧日のない時代だった。

小学部は現在の高等部校舎の北端の一部の一階二階の六教室が主体だった。部長室、職員室も今の保健室が当てられていた。小講堂が音楽室を兼ね体育室校庭は中高部と共用だった。図工室家庭科室理科室も不便な共用であった。校庭の北側門が小学部の通用口であった。外崎部長の偶居も校庭の一隅に在った。

幸い校舎が戦火を免れ殆ど現状のまま残っていた。学童の疎開教育から解放された復校生は僅か60名だった由。食糧、交通、経済事情にも比較的恵まれた父兄層が、一人用の机椅子、個人ロッカーまで備え付けの整った教室での落ち着いた教育を望んで、復校者や入学志望者が急激に増加した。当時の一般公立学校とは比較にならない恵まれた環境だった。一学年一学級50名(内25名英和幼稚園児から)の六学年編制300名の在校生だ

った。事務会計受付室も個室で玄関役をつとめ、中高部のキャフテリアは小学部専用の食堂化して利用されていた。完く戦後の公立学校では考えられない施設だった。

教職員も殆どクリスチャンで、担任は教会学校の教師として奉仕していた。

学校生活も毎日敬虔なる礼拝が小講堂でもたれ、宗教々育行事も充実したものだ。奉仕活動も校外にも及び、公共施設や福祉事業団への慰問なども顕著な活動であった。

食堂で全員会食。六年生がホステスをつとめ、母が調理の一端に手伝う家庭的な姿をみて、教育の本当の場が展開されていると驚いたものだ。戦前からの学校給食、食堂での教育の場、先覚的な存在だった。

小学部生は学院の子として愛され、中高部生との交流面も自然であった。車中での世話や座席ゆずりは自然でうるわしいものだった。英和の子どもとして一体感が培われていた。

学院の主な行事も各部合同であった。運動会、学芸会、卒業式、創立記念式等々多くの父兄も参加して学院全体の姿がみられた。従って保護者の学院に対する認識と関心度も、全体観へと心の交わりも濃さを増していた。組織の大小や合同の困難などを超越して総合的な姿の相互作用が教育の重要な面であると思った。これが実現していた。

70周年記念式典行事、85周年記念合同運動会（駒沢グランド）、87年の合同音楽祭（渋谷公会堂）等々子ども等に数年後の姉さん方の活躍の姿を観せる好い機会、教育の場であった。

カナダからの宣教師の先生方の人格教育は敬仰に価するものがあり、その影響の大きかった時代だった。

戦後の生活も一応安定し、学校教育のよりよい内容充実のためにも、小中高合同校舎使用の不便も痛感され、加えて六三制の学制変更の帰結として、小学部が分離独立校舎を持つことになった。院長部長の献身的な熱意ある活動が始まった。

理事会後援会財界父兄一般の理解ある賛意援助を得て現在の小学部新校舎が昭和29年に落成した。格別中枢の支援者は当時日本銀行総裁の現後援会長一万田尚登氏だったと思う。

その間外崎部長の抱負と教育に対する熱情は燃えながらも前面には幾多の難問が到来壁に突き当たった。心労困窮の限りでもあった。狭い部長室に教員が集まり部長中心に新校舎建築が進捗するよう祈禱会をもって真剣な祈りを捧げたことが忘れられない。収容人員も倍増して一学年二学級の12学級編成となり在籍児童数も500名となった。

新校舎は学校建築としては超近代的で大江宏氏の設計竹中工務店の全力傾注の刮目すべき建築物。東久邇邸跡の三千坪敷地内の大樹にかこまれた芸術品の校舎だった。原色の色彩にも驚いた。建築学会の諸大家や各大学の建築学科生の指導教授

共々の参観などで数年間は応待に忙しかった。建築関係の雑誌にも飾られた。他校の新校舎建設上に幾多の参照考究点の要素を包含したもので自慢の校舎だった。だが講堂と食堂（地階）の建設が第二期工事として残されていた。その間毎日の礼拝は体育館で長椅子を毎日並べ替えて行い、給食は各教室に調理室から運ぶ公立学校同様であった。この不便も解消されて35年には校舎にマッチした新講堂地階食堂が美しい姿で落成した。またこれの進捗に先きんじて追分寮の落成。これまた軽井沢追分に夏期施設としては誇れる100名収容のものだった。他の施設や旅館等借用していた夏期行事も充実したものが実現された。

修学旅行も箱根一泊が日光方面松島へと延び、更に東北方面十和田湖、津軽りんご園へと今日のみちのくの旅四泊五日の修学旅行の進展を生み出した。父母の同伴希望を許した時代も数年続いた。

後援会母の会の親密な運営にもみるべきものがあり部長の抱負意図を満した会の実情だった。

対外的方面での外崎部長の活躍は目立ち、日本私学のため、全日本私立小学校連合会、東京初等学校協会、その研究会等の運営に理事として中枢的働きをして今日の基礎を定着させた。キリスト教学校教育同盟に小学部会を誕生させて今日の盛会をみるに至った。公立の小・中・高校のキリスト教信者の教師の会も発足させてその運営にも当たった。従って自ら東洋英和の声名が昂揚された。

特別教室の増改築で音楽室視聴覚室英語教室家庭科室理科室が41年完成。学校施設も殆んど整った。

いよいよ落着いて教育内実へ歩みを進める意欲熾んなどころ不如意、大きな功績を残し、小学部の声名を内外に昂揚しながらも、外崎部長は年度中ばで退任となった。教職員の動揺が大きかった。暫時長野院長が小学部長兼任、小生は副部長とし

て補佐。42年小学部長に就任した。

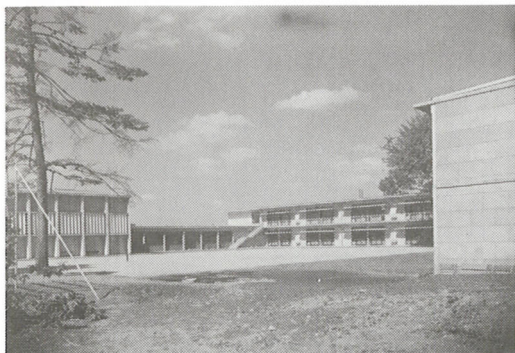
神から託された使命をもつ学院である。毎日礼拝で学校生活が始まる恵みに感謝の緊張した生活が始まった。

新校舎に移転し各学年二学級となってから、児童担任父兄共々に自他の組の比較批判が顕著になりライバル意識が露骨となり苦慮した。六ヶ年間持ち上りの担任経験を持った教育的良心の反省から、卒業までに二、三人の教師と多くの友人との交渉接触が必要と痛感していたので、三年と五年で組替、担任も交替、関係者一同清新な気で教育に当って貰った。

入学応募者も年々増加、選抜にも苦慮、嬉しい悲鳴をあげた。試験前に入試説明会を開き志望者父兄の関心と認識に迷い誤解がないか啓蒙した。英和の姿をよく考えて貰った。格別宗教教育、進学指導準備校でない点、一貫教育の精神を理解して貰った。この説明会の説明談ほど真剣で疲労を覚えた時は他になかった。

入試の方法も年々検討、教師たちのご苦労の累積された特色あるものだった。応募者も10倍を越してその対策に失策なきよう胸を痛めたことを忘れられない。

参観日などもやゝ閉鎖的だったが、前向きに定期的回数もふやし、父兄との交流の場を増した。



昭和29年新築の校舎



新校舎の玄関（右手に池があった）

母の会の運営活動も在来にも増して、より積極的自主的になり、委員の選出方法も毎年反省を加えてその方法・内規も進歩的なものになった。

聖書の会も一部有志の会員制だったが、母の会宗教部の働きとして全員に参加希望の間口を開いた。教養部の源氏物語講演も講師にその人を得、村山リウ先生の人格が反映して物語の講演そのものよりも教育的指示の演出の影響が大であった。両会とも毎月一回数百名の参集を得て存続してる。

教育課程の検討実施。顕と隠とは事物の真相である。顕のみに固執して隠を忘れ、見落して、見える見えないと言い張るところに罪がある。真実の観察を誤る。教師の周りには純真無垢な影響を受け易い児童が居る。接する教師の謙虚な態度が緊要である。総合的な相互作用の中に児童を育成していることが必要だ。学院全体の顕隠両面を看破しての教育であれと考えた。

英和教育の実体を大樹に例えれば、教育はこの大樹の成生した今日までの土壌を、その環境を考えねばならぬ。そして新しい樹液を注いで立派な枝を伸ばし開花させ結実させるのが教育だ。先哲の言を噛みしめたい。

学院に職を奉ずる者の先ず大前提として服さなければならぬ教育の根本要因がある。その大前提は全体の教育課程である。人間すべて生存する

には先ず服すべき大前提がある。これが拘束力となり無言裡に、顕隠となっている。吾人の言動がしられる力となっている。

もし、だれかが、あなたをしいて一マイル行かせようとするなら、その人と共に2マイルを行きなさい。このバイブルの意をくみ私は2マイル精神と称して処世指針にしている。先づ1マイル行く使役をしいられて、拘束されながらその者と共に2マイルを行きその使役を免脱せねばならぬ。そして自己の自主的な役務に悦び自由の境地を得て、自らも他をも生かす立場であれと念じている。

世はあげて進学準備、受験体制下の学力注入の教育過熱時代。中高部からも小学部学力充実を求められてきた。今更五日制堅持などは時代後れと評されもした。六日制に替えて時代的要求に応えた有名私立校もあった。しかし英和の大樹に新しい樹液を注いで枝を伸し、開花結実させるにはむしろゆとりと潤いある姿の人間教育を念じて、その歩みの基本をなす全体の教育計画即ち教育課程の検討実施の歩みを進めた。

職員組織（校務分掌）、教育課程（単元）、宗教教育（年、週間プログラム）、生活指導（児童手帳かえでの活用）、私立学校の主体性自主独立性を忘れず、公立学校化の傾向を反省しつつ建学の精神の生成発展を祈念した。

線後教育の反省として経験主義にきびしい批判をし、系統的学習の叫び、横の道德強調に走り縦の道德の欠除、畏敬の念を忘却した人間教育の姿、知的注入偏重教育を戒め、人格と人格の接触を打ち出せ（宗教教育の基底・建学精神、教会学校出席と五日制）、点数採点主義の反省などから基礎



昭和35年新築の講堂

的陶冶に単純に帰れ。基礎的学習は学校の任務。学習事項の精選、学習内容の思い切った削減。七時間授業の廃止。成績通知票の大改正（実は廃止しなかった）。等々の見地から文部省の指導要領の半ば拘束要請に程遠い年間授業日数、教科の配当時数、自由時間の特設と、担任の自主的工夫創意にまかせ思い切った教育課程を生み出した。

日本私立小学校連合会幹部研修会（44.1.23.24.広島会館）で関東地区から「教育課程の検討に当たって」と題して研修提案した。宗教教育実施校の関心、格別カトリック系の学校の関心が大であった。閉会后特別に懇談会を求められ、その歩みの実情と困難の度を述べ検討への意欲を昂めた。

その間教頭を中心に全教師各分掌しての研究検討には苦労が多く、内心検討続行を中止しようかと幾度も考えさせられた。にもかかわらず他校からの資料等参照し実に充たされた立派な教育課程の山なす印刷物にまとめられて誕生した。これが実施活用に入った。苦労した諸先生方に感謝のほかなかった。50年3月退任した。

あとがき この号は小学部関係のものを載せました。貴重な寄稿をありがとうございました。紙面の都合で江良先生原稿の一部を割愛させていただきました。100周年にむけて、よりよい紙面の充実を念じています。暑い夏をお元気にお過ごしください。（小学部・竹井、野田）

史料室だより 号外 1980年7月14日

史料室だよりNo.9は紙面の都合で止むをえず「小学部と共に25年」の原稿末尾を一部割愛させていただきましたが、この部分は小学部はもとより、全学院の先生方にぜひご一読いただきたいものと考えまして、執筆者江良顕三郎先生のご承諾をいただいた上、下記のように別刷添付させていただきました。

No.9の本文末尾に続けて、ごらんください。

(No.9編集担当・小学部一竹井・野田)

55年4月から小学校で新指導要領によるゆとりと充実の教育実施に入る。文部当局が大きくゆとりと教育を掲げたことを考え、愚かなおごれる姿などと評された小学部の教育課程実施の数年間、あながち後れた姿でもなかったと愚考している。

今年また現小学部では新しい教育課程の検討開始に歩むことでしょう。学歴競争に勝つための学力だけ求める教育課程でなく、学校生活全体のゆとりと充実でなければならぬ。幸い40名の学級でもある。単なる時間的短縮をゆとりある姿と安住せず、日々の学習授業で創意工夫をこらし、子どもに対する謙虚なゆとりある心根で体当たりして貰いたい。イエスが教へ訓された時の数々の場面を、私はゆとりある態度だった・間をおいての教示であったと思っている。ゆとりと充実した教育に邁進を祈ります。

(この原稿は今年1月19日にいただいたものです。)